

特集・〈いのち〉の声をきく

## 未来へ続く道

『ホピの予言』に私を導いたもの

宮田 雪

(一)

十年前、わたしと家族は東京の奥多摩の千九百メートルほどの山の中腹にある農家を改造した古いお寺に住んでいた。大寺山というその山の頂きにはお釈迦さまの舍利をまつた御仏舎利塔があり、故藤井日達上人を導師とする日本山妙法寺の僧伽の人たちが何年もかかり資材を人力によって山頂まで運び、それは湧現したものだったが、まだ参拝用の道が出来ておらず、わたしはひとりのお坊さんとわずか二、三人の村の人とその道を作っていたのだ。

突然、山に入ってしまったわたしを心配して訪ねてくれた友人のなかには、なぜ、生活を放棄してまでそんな道づくりに没頭するのか、とあきれ顔をするものもいた。端から見れば無理もない話だった。長男や長女はまだ幼く毎日小学校や保育園に通うためには急な山道を昇り降りしなければならなかったし、道を作る仕事は純粋な奉仕でなんの報酬が得られるわけではなかった。だが、それより数年前、インドを旅し、それ以来わたしは自分の内から聞こえてくるいのちの声としかいいようのないものに耳を傾け始め、藤井日達上人という、わたしの知り得る限り、近世の仏教者の中で最も厳しい修業を積みお釈迦さまの教えを身を持って体現化し、日蓮上人の予言をその歩みで実現成就し、菩薩行をされた方に出会ったことで、その声が仏さまからの声であることを知らされたのだ。以来、わたしは法華経を信仰し、南無妙法蓮華経というお題目を唱え、その教えに導かれてきたのだが、結果として、それが御仏舎利塔への道を作ることになったのだ。いや、それより他に歩くべき道そのものがない状態に立たされてしまったというのが正直な気持ちだったのかもしれない。

ともかくも、道の上を歩き始めたまだ赤ん坊のわたしに仏さまがお慈悲として、道を作るという奉仕を与えられることで、他ならないわたし自身の心に尊い仏さまの世界へ通じる場を与えて下さったのだと感謝する他はなかった。

一年が過ぎて、山頂からの道が丁度中腹あたりまで完成しかかった春先だったと思う。ひとりのお弟子のお坊さんが真っ黒に日焼けした顔でわたしを訪ねてきた。前の年、アメリカでは「コンチネンタル・ウォーク」という軍縮と社会正義のための大陸横断平和行進が行なわれ、彼はアメリカの人たちとロスアンゼルスからワシントンまでお題目を唱えて

歩き日本に帰ってきたばかりだった。

「アメリカを歩いた人たちが今年は広島への行進を計画しているから一緒に歩いて、その人たちのお世話をしてくれないだろうか」

ヒロシマ。あの原爆を投下された同じ年にこの世に生まれながら、わたしがヒロシマを自覚したのは正直言ってそのときが始めてだった。わたしの日々作っていた道は御仏舎利塔を礼拝するための道だったが、その道が、出生の原点につながっているのかもしれないという予感にわたしの心は大きく揺れ動いた。そして、仏さまの大きな力ともいえるべきものに引かれてとしかいいようのないものに導かれるままに、わたしはアメリカからやってきた陽気なヒッピーや信仰厚いクエーカー教徒たちと一緒にヒロシマに向かってその道を歩き始めることになった。

その道は三十数年前、西本あつし上人というやはり日本山のひとりのお坊さんが始めて歩かれ、核兵器の廃絶を願う人々がそれに続き、それ以後、無数の平和を願う人々の折りにより続いてきたものだった。歩いていくうちに、わたしは沿道の人たちに礼拝していくことで、どんな人々も心のなかに尊い仏さまというものがあり、それを自分の内と外に呼び覚ますために仏さまがわたしを歩かせて下さっているのだということを知らされていった。

三ヶ月後、ヒロシマに着いたとき、その道の上にひとりのアメリカインディアンが加わった。彼は、リー・ブライトマンといいスー族という名で知られるダコタ出身のインディアン運動のリーダーのひとりで、日達上人がお弟子の峰松上人という人を通してアメリカから招待したのだった。この峰松上人がなぜリーをヒロシマに連れてきたのかと言えば、彼もまた、コンチネンタル・ウォークを歩き、その後、全米のインディアン居留地をお題目を唱えインディアンの平和を祈って行脚し、仏さまの導きのなかでリーと出会い、そして、仏教徒の平和への祈りを理解してもらうためだった。だがヒロシマにインディアンがいることがどんな意味を持っているのか、わたしにもアメリカの人たちにもその真意が理解出来なかった。それからわずか半年後に、わたしや行進に参加した大勢の仲間たちを包み込む大きな渦が準備されていたとは誰ひとり想像さえ出来なかったのである。

だが、ヒロシマの地での日達上人が彼、リー・ブライトマンに語った言葉がわたしの心に深い響きとなって残り、それは、ヒロシマから再び御仏舎利塔への道作りの生活に戻ってからもなお、不思議な予感と昂ぶりをもちながらわたしのなかに波紋のように広がっていった。

「宗教的信念、ここから平和を求めて立ち、足場を作ります。そのためにあなたを招待したのですが、これは小さなこととは思っていません。将来のアメリカの革命、非暴力革命の第一歩の導火線にと思って招待したのです。世界革命の先端、アメリカの平和革命のその中心に、アメリカインディアンに立って頂かななくてはならない」

非暴力。日達上人にとって、この言葉は仏教の不殺生戒、すなわちあらゆるいのちあるものを敬うことの実践であった。上人は若き日にインドでアヒンサ(非暴力)を実践すること

によってイギリスの支配から独立を勝ち取ろうとするマハトマ・ガンディ翁と出会い、上人のうちわ太鼓とガンディ翁のアヒンサの象徴であった糸車(チャルカ)とのこの出会いは、平和を希求する力の源泉となり宗教の違いを越えたものとしてひとつに結ばれ、インドの独立の大きな力となったのだ。その上人の非暴力の精神がアメリカインディアンの心に確実に伝わっていった。

## (二)

半年後、上人の言葉は現実となった。アメリカインディアンによる非暴力革命の第一歩が記されることになった。インディアンの人々が合衆国の圧政に対して、アメリカ大陸を横断する「ザ・ロンゲスト・ウォーク」を開始しているというニュースを、やはりコンチネンタル・ウォークを歩いた河本和朗君が伝えてくれたのだ。彼の手紙によれば、行進はサクラメントから一三五マイル、ネバダとカリフォルニアの国境まで四八時間をノンストップで歩き、全米から集まった多様な部族が、ピースパイプを先頭に捧げ持ち、以後、一日平均五十キロの猛スピードで、酷寒のシェラネバダを越え、雪のロッキーを越え、ワシントンDCに向かって歩いているというのだ。その行進をオーガナイズした一人がリー・ブライトマンだった。インディアンは自らの信仰する偉大なる精霊、グレイトスピリットへの祈りを信念として圧政そのものにストップをかけようとしているのだ。それはまた、わたしたちが仏さまへの祈りである南無妙法蓮華経を唱えることで核兵器の廃絶を願うヒロシマへの道を歩いたことと同じ道の上にあった。

当時日達上人はスリーランカに御仏舎利塔を湧現されておられたが、直ちにお弟子たちにこの行進への参加を命じられ、自らも九四歳のお年でありながら行進の成功を祈るためにアメリカに渡られ、共に歩かれることを誓願された。

ウーデットニイを始めとして、武装闘争を続けてきたインディアン運動のリーダーだったデニス・バンクスが逃亡中にリーの家で逮捕され、カリフォルニア州だけがデニスを保護するという状況のなかで、インディアン運動自体が大きな転換を迫られ、リーやデニス、運動の方向性を日達上人の教えから学んだのだということ、アメリカに渡るために一時帰国した峰松上人からわたしは聞いた。あの広島でのリーに語った日達上人の言葉をわたしは新たな感動を持って思い出していた。数日後、わたしはスリーランカから帰国された日達上人から次のような言葉を聞くことになった。

「インディアンの使命は、自分が『民族の生きてゆく道を探す』『失った国土を取り返す』ということではなく、世界の平和を作る上での中心の働きをする。それがインディアンという民族の今まで生存してきた、今日の時代を救うために信仰生活を続けて平和を求めてきた所以です。インディアンの使命は世界を救う、そこにあります。使命を信じて立つときに、目に見えない神様が皆我々の味方になる。どんなことでもいい、インディアンを助けなければならない」

それからしばらく立ち、上人の掛錫していたお寺に泊まっていたときのことである。朝の勤行が終わり、上人の部屋で御挨拶をするのが日本山の習慣になっていたが、その朝、突然私は上人に呼ばれ、前に出ることになった。いったいなんなのか、訳が分からずただ合掌していたわたしに上人は「写真代」と書かれ御供養の入った封筒を差し出された。まるで冷静さを欠いていたわたしには、それがなにを意味しているのか、理解出来るだけの心の余裕もなく、ただうろたえるという醜態をさらすしかなかった。写真代というその封筒に書かれた文字が、わたしにインディアンの使命というものを広く伝えよ、という意味であり、そのための仕事を仏さまはわたしに与えられたのだ、と冷静に受けとめるようになるまでにはしばらく時間が必要だった。

数日後、ロスアンゼルスへ向けて旅立ったのだが、着いた翌日、ひとつの平和行進がわたしを待っていた。それはロス郊外のスタジアムで行なわれる反核集会の成功を祈るための行進で、ニューヨークで開かれる第一回国連軍縮総会に呼応するものだった。

わたしは日本山のお坊さんたちとロスの街を太鼓を叩きお題目を唱えて歩き、大勢の反核を願う人々の拍手に迎えられ、スタジアムに入っていった。そして、その日、ダニエル・エルスバーグらと共にスピーカーとして集会に参加するためアリゾナからヒッチハイクでやってきたひとりのインディアンにわたしは出会うことになった。彼がホピのメッセンジャー、トーマス・バンヤックその人だった。わたしは日達上人と、仏さまの導きによりインディアンをサポートするために日本からやってきたことを告げると、トーマスはわたしの顔をじっと見つめ、やがて傍らの古いトランクの中から一枚のキャンバスに書かれた絵を出してわたしの前に広げた。

「わたしたちはあなたたちがやってくることを知っていた。あなたたちは特別の役割、使命というものを持った人たちで、太陽(タワ)のシンボルを持つ人々だ。わたしたちは遠い昔から、あなたたちのことを知っていた。遠い昔に、わたしたちの土地からあなたたちは他の土地に別れていったが、ある日、帰ってきてわたしたちを助け一緒になって、この核によって滅びようとする世界を浄化していくだらう、ということがわたしたちの予言に伝えられていたんだ」

キャンバスの隅には太陽のシンボルが書かれてあった。ホピの聖なる谷間に残されている岩絵から写したもので、これがホピに古代から伝わる予言なのだとトーマスはわたしに説明してくれた。だから、我々は逢か昔からあなたたちが帰ってくることを知っていたのだ、と。わたしは、その絵をどこかで見たことがあるような気がした。初めて見る絵に違いのないのだが、記憶のずーっと彼方にある、いのちの源とでもいうべきものとめぐり会ったような気がしてまるで魂を吸いとられたようにその不思議な絵に見入った。

トーマスは、一九四八年にホピのジョンゴパビ村で行なわれた四日間の長老たちの特別のミーティングで選ばれた三人の予言を伝えるメッセンジャーの一人だった。その四日間の会議は八つの村に別れているホピの伝統社会のなかでそれぞれ伝えられている古代からの知識を初めてひとつの場で検討されるためのものだった。

「太陽のシンボルを持つ国が『灰のつまったヒョウタン』を二つ空から投下され、世界を震撼させるだろうということが予言されていたんだ。それが、あなたたちの国、日本のヒロシマとナガサキで起こったことだった。この文明がこのまま進めば三つ目の『灰のつまったヒョウタン』が落ちる。それもこの大陸にね。だから我々は警告しているんだ」

灰のつまったヒョウタン、それは原爆のことであり、しかもヒロシマ、ナガサキへの投下が予言されているというのだ。インディアンが伝承してきたこの予言をわたしはそのとき初めて知った。

自分の出生の原点にあるヒロシマに向かって歩いたその半年後にこんな啓示に出逢ったことをわたしはただ運命と感じる他はなかった。「その予言はいつの時代から伝えられたものなのですか」

かなり興奮していたわたしの顔を驚くことはないという風にトーマスは見つめていた。「わたしたちの祖先からだ。あなたの祖先でもある。そう、すべての人類の祖先に昔、これはグレイトスピリットから与えられた啓示、ライフ・プランだ。わたしたちは、いついかなる時でもこのプランに従って生きてきた」

トーマスの説明によれば、過去においてグレイトスピリットの教えに従わなかった人々と国家は、戦争によって破壊され、日本が第二次大戦に原爆を投下されたのも、そのグレイトスピリットの戒めのためだというのだ。

「太陽のシンボルを持った国は、『灰のつまったヒョウタン』によって一度滅ぶが、その後新しい世代が立ち現われる。その人たちが今度こそグレイトスピリットの教えに従い、わたしたちを助け、この世界の荒廃を救っていくだろう。だからあなたたちがこの大陸にやってきた人だ」

トーマスは、自分は三人の選ばれたメッセンジャーの最後の生き残りだといい、全米各地で開かれる反核や、反原発などの集会に出ては、この予言を伝え回っているのだと言う。わたしの思いを察したのか、トーマスはこう言った。

「きっと、また、会えるだろう」

(三)

数日して、彼の言った通り、わたしたちはニューヨークで再会した。第一回国連軍縮総会を挟んでニューヨークの各地では核廃絶のための数多くの集会が開かれていて、トーマスは、そのいくつかでホピからのメッセージを伝えるためにやってきていたのだ。

「わたしたちは予言にもとづいてここに来ているんだ。過去にも二度、わたしたちは太古から伝わる聖なる教えに従い、聖なる使命を果たすためにやってきたんだ。ホピの指導者たちは、東方の母なる大地の端にある『この時、ガラスか雲母で出来た家が建ち、問題に直面するすべての人々を助けるため様々な国の指導者たちが集まってくる』と予言されている場所に行く時が来たと感じたからだ。」

わたしたちホピは、ホピや多くのインディアンの兄弟たちの母なる大地が取り上げられようとする時、また、わたしたちのいのちの道が白人の中の邪魔な者たち、白人に影響されたインディアンの兄弟たちに完全に破壊されようとする危機に傾いた時にこの場所に来ることになっていたんだ。しかし、いまだかつてホワイトハウスも国連も聴く耳を持たなかった。この国がわたしたちインディアンに対して行なってきた過ちを悔い改めることをしないので、彼らの罪はうず高く積み上げられたままだ。だが、わたしたちの教えでは最低二つか三つここに集まる国の人々がわたしたちに耳を傾け、理解を示すだろうと言われている。彼らもまた、太古からの教えを知っているはずだと言われているからだ。そして、わたしたちホピからのメッセージを聞くと直ちに、彼らはグレイトスピリットからこの地球といのちを守るように委託を受けている選ばれたインディアンに対してなされてきた沢山の合衆国の過ちを正すだろうと言われているんだ」

わたしは、是非、日達上人に会って予言のことを伝えて欲しいと思ったが、当時、上人は国連に核兵器禁上を訴える要請団と一緒にニューヨークにこられてはいたがスケジュールは多忙を極め、トーマスと幾つかの集会で顔を合wash挨拶を交わすことはあっても話し合う時間を作ってもらうことは難しかった。それでもわずかな時間だったが、ホテルのロビーで会って頂くことが出来た。上人は破顔一笑され、静かに合掌しながら予言の絵をじっと見つめ、トーマスの説明に耳を傾けておられた。それから数日後に、わたしが上人の導きでホピのくにを訪れることになるとはこのとき知る由もなかった。

わたしは一日も早くロングスト・ウォークへ合流したかったが、なぜか上人のそばを仲々離れることが出来なかった。ロングスト・ウォークは既にイリノイ州にさしかかっていた。今日は行こう、今日こそはと思いながら、そのことを上人に伝えると、決まって上人は微笑まれた。その度にわたしは上人のもとを去り難く、というより、不思議な上人のエネルギーでとどめさせられたという他はない。長旅の疲れを上人はシスコ郊外の温泉で癒されておられたのだが、ある日、二通の手紙を書かれ、その一通がロングスト・ウォークのコーディネーターであったデニス・バンクス、そして、もう一通がトーマスにあてられたものだった。それは、二人をこの温泉に招待することで共にロングスト・ウォークの成功を祈りたいという上人の慈悲の現われだったと今、改めてわたしは思い出すことが出来る。そして上人はその書簡を持ってホピに行く仕事をわたしに与えられた。シスコに来ていた阿木幸男さんに車の運転をお願いして、わたしはこうして初めてホピの大地、ホピの人々が「At the Center of the Planet」(地球の中心)と呼ぶその大地に入ってしまったのだ。

フェニックスからフラグスタッフを抜け数時間北へ走り続け、どこまでも続く砂漠の中の本一の長い道の彼方に姿を見せたホピの村はブラック・メサと呼ばれる丁度、三本の指を開いたような、その指の上にあたる場所に存在していた。わたしは、その大地に立った途端、初めてではない、ここには一度来たことがあるという不思議な感覚に襲われた。あのロスで初めてトーマスに予言の絵を見せられたときに感じたものとそれは同じだった。そこが、ホピの教えによれば、わたしたち全ての人類の祖先が初めて前の世界から第三番

目の世界と呼ばれるこの世界に脱出してきたときに世界の四つの方向に散っていった大切な土地であり、この地球のバランスを保つための聖地であることを知ったのは、後のことである。

トーマスは、ホピやディネ(ナバホ)の長老たちと会議の最中だったが、すぐに上人からの手紙を読み、更にそれを全員の前で読み上げた。後にトーマスは、そのときのことをわたしに次のように語ってくれた。

「あの時、わたしたちの主要な精神的な長老たちが集まり三日間会議を行っていた。その時に藤井グルジーからの手紙が届き読ませてもらったのだが、その時にわたしたちは、今以上にスピリチュアルな生き方を継続していかなければならないということを再認識させられた。そして、グルジーの手紙により、本当にわたしたちの祖先が伝えてくれたスピリチュアルな道が正しいものであったということを確認し、わたしたちに勇気というものを与えてくれた。もし、わたしたちのこうした平和の道に対して誰も耳を貸そうとしなかった場合、必ず海の向こうから誰かがやって来て、わたしたちのスピリチュアルな生き方に対して、言葉を通して鼓舞してくれるだろうということが予言されていたんだ。あの三日間のミーティングで最も大きな出来事はグルジーからのメッセージだった。グルジーのような長老から伝えられるメッセージ、そのスピリットというものは、遙か昔に、このような真実の種というものが植えられて、それが大切に育てられ、今日に伝えられるのだということ強く感じた」

翌日、わたしは日達上人のもとにトーマスを連れていくことになった。このシスコ郊外の温泉で語られた二人の対談を間近に聞きながら、わたしは、日本を立つときに上人がインディアンの使命を広く伝えよといい、「写真代」として御供養してくれた意味が、このホピに伝わる予言を伝えるためのトーマスの手助けをすることにあっただと知るのである。ここにその対談の一部を再録したい。

#### (四)

**藤井日達** 暴力文明はアフリカに集中し完成されています。ソ連も競ってこれを争っていますが、しかし、誰の目から見ても共にいきづまっています。このままでは両方とも滅亡する以外に道がないことがわかり始めてきたようです。どうすれば人類がこの地上に安らかに暮らしていくことが出来るのかという問題を考え始めるでしょう。こうしたときに、インディアンたち、特にホピ族の先祖伝来の考え方、宗教的な伝統というものが初めて現代文明の表面に現われてこなければならなくなったようであります。アメリカの政府がこれまでインディアンに対して行ってきた暴力的な政策や強要を改めさせ、インディアンの平和な伝統である、人を殺さない、物を施していくという考え方を復活させなければなりません。これも、ただ政策とか経済とかの面を変えるのではいけない。ここに日常生活が祈りの信念から離れないホピ族初めインディアンたちの存在と力が大きく認められます。

「ホピ平和宣言」を拝読いたしました。これはまことにさん然たる、光り輝く立派な現代の指導教科書であります。ホピ族の長い間の歴史、暴力に対する徹底した非暴力の伝統がいよいよ実証され、将来の世界平和を作る上の模範となるべきときであります。

**トーマス** グルジーのお話しをうかがっております、わたしは同じホピ族の祖先で百歳近くまで生きた偉大なる指導者だったユキウマのことを思い出します。ユキウマの生涯はまるでガンディのようでした。その徹底した非暴力のためにアルカトラス島に投獄され、足を鉄の玉で縛られ餓死寸前の状態まで弾圧を受けました。しかし、彼は最後まで決して信仰を捨てませんでした。生涯質素な生活を送り、偉大なる精霊、グレイトスピリットの精神的指示に従って生活してきたのです。ユキウマのこの生き方をわたしたちは伝統として守り、そのため後に兵役を拒否したわたしたちの何人かがやはり投獄されました。数え切れないほどの白人たちの弾圧や彼らがわたしたちの民に仕掛けた陰謀、そのために起こった憎悪や誤解、混乱にもかかわらず、わたしたちが今日まで非暴力の教えを守ってこれたのは、偉大なる精霊、グレイトスピリットから伝えられてきた予言や啓示、伝統的な宗教儀式というものを保ち続けてきたからです。この予言にはただいまグルジーがお話された通り、暴力文明が間もなくいきづまりを告げることが啓示として記されております。また、未来のことも記されております。わたしはこの予言を世界の人たちに伝えることで、わたしたちの教えや宗教を通じ、互いのいのちあるものの調和、自然のすべて、雲、雨、動物、植物との調和のとれた平和な生き方を理解し合うことが出来ると信じています。そして共に理解し合うことでわたしたちが予言のなかで「浄化の日」と呼んでいるその日に敢然と立ち向かうことが出来るでしょう。私たちはその日のためにこそ宗教と平和な生き方をグレイトスピリットから授けられたのです。

**藤井日達** 仏教のなかでも南無妙法蓮華経を初めて唱えいだされたのは、日本の日蓮大上人様であります。この方の宗旨の建前がもっぱら、仏さまのお経、仏さまによる予言を信じて、国難を避けようという方針でした。それで、そのときの政府に諫言をなされたのです。けれども予言などというものは当たってみなければ皆分かりませんから、空なことを言って人をまどわすといつてそのために日蓮大上人様は島流しになりました。けれども終生、その自らの信念を変えずに諫められました。その後およそ二十年たって蒙古の大軍が日本を襲ってきました。これは将来とも仏さまのお経に照らし現実の世の誤りを見て正さなければならない。天変地異、飢きん、疫病、大雨、地震、日月の変動、これらをお経文から検討されまして日蓮大上人様は日本国の将来を予言されたのです。今、ホピ族の予言の話をお聞きし、未来記を信じられるその生き方とはなはだよく似ております。日本の仏教の中にはほとんど予言を信じるなどというのは他にありません。涅槃や、わが心、身体が行ないを規則正しく暮らす道を説くのが仏教のように考えます。それも良いけれども、大きい問題はやはり天地そのもの、人間そのもののなかにあります。これを仏さまのお説きになったお経文を頼りに見出します。ホピ族は、祖先伝来この予言という宗教的な意味において世界というものを眺められましたが、今、それがようやく現実となった。そ



してそれを皆信じていくところに精神生活が営まれるわけです。

**トーマス** わたしたちは、偉大なる精霊の啓示に従い訪れるどんな人々も歓迎し、自分たちを犠牲にしても持っているものを相手に捧げ彼らの生活が楽しめるようにという伝統を守ってきました。それは今も変わっておりませんが、この事実は残念ながら認識されておられません。なぜなら、人々はより豊かに物質的利益を得ることに血眼になっているからです。そしてこの物質的欲求は今日、権力、さらには核兵器の製造、エネルギーの乱用にまで及び、わが民を初め世界のスピリチュアルな指導者たちの上に大きな圧力をかけていると思います。

**藤井日達** 軍備をやめる、暴力を止めるにはどうすればいいか、それが現代の問題になりましたが、軍備をするということは、相手方を疑うから、相手を恐れるから、それで軍備をするようになります。では軍備を全部撤廃していく次の世界の安全はどうしたら保証されるか。それは人を疑わず、信じ、恐れぬことの条件がしだいと育てられれば世界に軍備など必要なくなります。その手本がアメリカのインディアンと西洋から入ってきた移民たちの間で示されました。インディアンの今までとった態度が、移民たちを信じ、恐れずに招き入れた。そのことをよいことに暴力をふるってインディアンを殺した。これが現代文明のいきづまりのもとになりました。それでここでインディアンの文明が将来のアメリカの文明にとって代わります。宗教文明、人を疑わず、恐れぬ大いなる天地の法則、大いなる魂の力がこれを導いていくことを信じていかねばなりません。これがホピ族はじめインディアンの大きな役目であり、人類の助かるただひとつの道のようにあります。

**トーマス** わたしたちの祖先もグルジーが現在おっしゃられたことに気づいていました。祖先たちもすでに今日のような時代がくることに気づき、この日のためにこそホピの伝統的な生き方と予言を保ち、辛抱強く世界の人々が精神的なものに目覚めるのを待っていたのです。今こそわたしたちは共にひとつにならなければならないでしょう。ひとつになってその力を結集しなければ生存していけない時がまいりました。ときを急がなければならないと思います。ときの流れを見ますと、世界中の指導者たちはいのちを破壊することを競っております。ぜひ精神的な生き方を統一しなければこの力を押しとどめることは出来ません。

## (五)

ロンゲスト・ウォークがワシントンに着いた日、ホピの最長老デービット翁と共に来ていたトーマスとわたしたちは数ヶ月振りに会った。デニス・バンクスからカーター大統領宛に提出された正式文書の中に日達上人のアメリカ政府に対する諫言書とホピの予言があったことを聞いていたわたしは、そのことを彼に聞いた。

「そう、このロンゲスト・ウォークもわたしたちの予言の中で既に語られていたことだ。東から西に追われ西から東へ大きく動いていく時代がくるという言い伝えだ。そのことに

よってこの大陸にもう一度スピリットが戻ってくるそうだ。だから、これは予言の成就する過程なんだ」

トーマスやデービット翁たちはロンゲスト・ウォークの成功のために毎日、あの砂漠の中で祈りを捧げていたらしいのだ。

わたしは自分の歩いたワシントンまでの道のりがホピの予言の道の上にあったことを改めてその時知ったのだった。

数ヶ月後、わたしはホピのショングパビ村の聖なる谷間にある岩山の前に立っていた。グレイトスピリットであり、ホピの言葉でマーサウと呼ばれる偉大なる精霊は自分の司る大地をわたしたち人間に差し出し、自分の教えに従ってそれを使うように示していた。そして、その教えに従い大地を使えば全ては永遠に続いていくということを教えていた。かつて、数多くのホピの長老たちが一族に起こる出来事と世界に起こる出来事を子細に検討するために何度この岩の前に立ったことだろう。偉大なる精霊、グレイトスピリットの計画、ロード・プラン。わたしは仏さまの声に導かれてその前に立っていた。そこから見える幾つかのメサはホピの人たちがツクナビと呼んでいる、母なる地球の中心点である。人々の主食であるトウモロコシの収穫や、あらゆる埋葬や雨乞いの儀式などすべては、この土地の人間の理解を越えた偉大な力に負っているし、季節の変化に応じて、キバと呼ばれる儀礼所で行なわれる儀式の後、伝統的なホピの人々は神々への祈りの羽根とトウモロコシの種をこの地に植えて歩く。それはまた、彼らのトウモロコシが豊かに実る願いが込められるばかりではなく、この地球上のトウモロコシの全てが豊かに実り、全世界の人々の大地と平和を祈るために行なわれるのだ。

だから、もしこのツクナビが失われるようなことになったら、ホピの祈りや儀式は力を失い、大きな災害がホピばかりではなくこの地球の上に生きているわたしたち全てに起こると言われていた。グレイトスピリットは人間が他のいのちあるものと共生していくことを学ぶまで、決してこのツクナビの地下にある資源に手をつけてはいけない、とホピの祖先たちに告げていたという。

そのツクナビと彼らの土地で今、なにが起こっているのかよく見るようにとトーマスはわたしに言い、その日からフォー・コーナーズと呼ばれるその広大な地域をわたしは旅し始めることになった。しかし、ツクナビに連なるメサのひとつに足を踏み入れてわたしは動けなくなってしまった。そこは巨大な石炭の露天掘り鉱山になっていたのだ。ダイナマイトが大地に炸裂し、数十台のトラックが土煙りを上げながら走り、鉱山専用の鉄道とパイプラインが数百キロに渡って伸びていた。採掘された石炭は近くの火力発電所で燃やされ、ロスアンゼルスやラスベガスなど大都市の電力はそこから送られているのだった。

ツクナビのなかにあるビック・マウンテンではそこに住むディネ(ナバホ)たちを強制移住させようとする政府の計画が進んでいた。その地下にも大量のエネルギー資源が眠っているのだ。トーマスやビック・マウンテンの伝統的なディネの人々は、その移住計画に反対していた。彼らは、すぐ近くの土地がウラニウムや石炭の採掘のために破壊され、その結

果、深刻な放射能被曝を受けた人々が続出していることを知っていたし、それよりもまず、グレイトスピリットの教えを固く守っているからだった。この土地をグレイトスピリットから管理する使命を与えられ、彼が再び戻ってくるまで彼のために守らなければならないからだ。そのために特にホピはこの大地の番人、地球を守る人としてこの土地に植えつけられたのだ。

だが、そうした伝統的な生き方を貫く人々の反対を押し切り、合衆国政府に管理された部族政府の手によってこの聖なる土地は次々と借地化され膨大な地下資源が掘り出されていっているのだった。地下水の枯渇は深刻な問題であり、彼らの作るトウモロコシにも影響が出ていた。

それにも増してウラン採掘による被害は最もわたしを驚かせた。採掘によって大量の放射性ラドンガスが大気中に放出され、しかも職のないディネたちは鉱夫として雇われ安全性の低い最も危険な労働を強要され次々と被曝を受けているのだった。精錬の過程で産み出される膨大な量の放射性廃棄物は、精錬所の周囲に数百キロに渡って放置されていた。それが風に乗り、砂ぼこりと共に舞い上がり、放牧中の羊や牛を、彼らの飲料水である川の水を汚染し、妊婦や産まれてくる赤ん坊に奇形児が増え始めているのだった。このウランニウム採掘が日本とも無関係ではないことも分かっていった。

チャーチロックというところにある精錬所で放射性廃棄物を貯めていたダムが決壊するという事故が起こり、数百トンの廃棄物と廃液が一瞬にして流れ出し、近くの川に流失した。この川の水は流域に住むディネたちにとって貴重な飲料水であり家畜用の水源だった。人々は企業を相手取ってすぐに裁判を起こしていたが、一年以上も放っておかれ、そのあげくがわずかな保証金しか与えられていなかった。そして、この精錬所だけでも年間総生産量の二パーセントが日本の原子力発電の燃料として輸出されていた。

全人類にとって母なる地球の聖地であるこのホピやディネの土地を破壊し彼らを被曝させながら、それを平和利用という名で消費し続けている日本とアメリカの姿、いや人間の持つ貪欲というものの姿をわたしはそこに見たような気がした。わたしはトーマスがこの土地で起こっていることを見なければいけないと言った意味がやっと分かってきた。それはまさしく、近代文明を押し進める人間の心のあり方を鏡のように写し出している土地だった。わたしたちは何も悪いことはしていない、決して誰も他人を傷つけたりはしていない、と誰もがそう思っている。しかし、わたしたちが多くのお金や物、それによって得られる豊かさを維持し続けようとするほど、それはまさしくこのインディアンたちを絶滅させることに加担するということになっていってしまうこの現代社会というものの構造に、わたしたちは互いに気づかなければならない。それらは直接に多国籍企業やその他の経済機構とつながり、彼らが利益を得るためにわたしたちの心や身体や、いのちはコントロールされているのだ。それに気づかないほど、わたしたちの心は汚染されてしまっているのだろうか。フォー・コーナーズの破壊されていく姿を追いながら、わたしは何度も絶望的な気持ちになっていった。

だが、トーマスたちホピの伝統社会の人たちは、こうした大地の破壊やウランや石炭、石油の採掘に始まり、核兵器、原発といった核開発に代表されるテクノロジーも、あのジョンゴパビの聖なる谷間に記されたグレイトスピリットの計画、ロード・プランが実現していく過程のひとつとして見ているのだった。そして、やがて、わたしたちは「浄化の日」を迎えるのだという。

あらゆる弾圧と迫害に耐えホピの予言を今日に伝えてくれた太陽一族の長老、ダン・カチョンバは、その生涯において様々なホピの予言が実現していくのをその目で見てきたという。そして、それだけではなく、彼は父、ユキウマから「お前はこの時代の最後の一大イベントである『偉大なる浄化の日』の始まりを見るまでは生きるだろう」と言われ、そのダンが死んだのは、一九七二年だった。

ホピの予言によればわたしたちは、今「浄化の日」を迎えるただ中に立たされていることになる。それを決めたのはグレイトスピリットであり、誰もそれを止めたり、それに何か言葉をはさんだりすることは出来ない。それは必ず実現すると、ホピは断言するのだ。だから啓示されているのだと。トーマスによれば、ホピにとっての「浄化の日」とは次のように予言されているという。

「太陽をシンボルに持った国の人と釣十字をシンボルに持つ人々と、それから赤い帽子か赤い衣を着た人々がそれぞれの方角から、わたしたちの聖地、オールド・オライビにやってくる。彼らは人数は多く、自分たちの宗教以外に決して属していない。また、彼らは聖なる石板を携えてやってくる。彼らの来訪は大変な力で何者も彼らを止めることは出来ない。この世のすべての力は彼らの手中にあり、彼らはたちまちこの大陸全体を支配するだろう。しかし、ホピは絶対に武器を取ってはならないと警告されている。それらのパワーがすべてこの土地で起こっている誤りを正して本来の道へわたしたちを導いていこう。しかし、もし、彼らとその自分たちに与えられた使命を果たさなかったときは、他の人たちが今度は西から来て、その使命を果たさなかった人たちに情け容赦なく罰を与えるだろう。この西から来る者は非常に人数が多いというだけで何者であるか、わたしたちには判らない。そして浄化の日に生き残ることが出来た人たち、つまり太古からの教えと導きに従った人々は誰でもグレイトスピリットに出会うのだ。なぜなら、彼こそが最初に出会い、そして最後に出会うものだからだ。そこにはまったく新しい世界があり、平和にあふれ、すべてのいのちあるものと調和のとれた、鳥や動物たち自然とも尊敬し合う見事に平和な世界、第四番目の世界が始まるだろう」

ホピは自分たちの生き方、ウエイ・オブ・ライフに従う人々を待ち望み、あらゆる迫害と差別、困難にめげず、今日まで自分たちの生活の仕方を忠実に守ってきたのだ。

「なぜかって、ホピはこの地球といのちあるものを、すべて正しき人々のために支えているからなのだ」

トーマスはわたしにそう言った。

御仏舎利塔を礼拝するための道を作ることからヒロシマへ、そして日達上人の導きによ

り、トーマス・バンヤッケのホピの予言を伝える仕事を助けるために始まった映画『ホピの予言』の旅は、多くのインディアン、日本人、アメリカ人たちの無償の協力により、やっと一本の映画として完成した。昨年八月のことである。それはまるで何かの大きな力に導かれるようにして出来上がったのだった。仏さまの、グレイトスピリットの力と信じる他はない。この映画を通じて、わたしはホピの道に気付き、それを存続させることが、わたしたちの子供や孫、未だ生まれざるいのちと、この地球を存続させることにつながることを一人でも多くの人々の心に訴えかけていきたいと思っている。日達上人の御存命中に完成させることが出来なかったことを悔やむが、この映画が上人の遺志をわずかでも継ぐものであるなら、わたしにとってこれにすぐる喜びはない。

南無妙法蓮華經、オールマイ、リレーション  
合 掌